

マリタは孤独になります。そしてまた、満月の夜を待つのでした……。

☆

もちろん、実際はこんな話ではありません。わたしはもうしてもこの絵本の文章を読みたくて、高校に上がったころからスペイン語の勉強をはじめました。そして大学生になったころ、ようやく絵本を正しく読むことができるようになったのでした。

それがどんなお話かは、今はまだしないでおきましょう。大学生になったわたしは、その絵本を手にはスペインに立ちました。

わたしはどうしてもその絵本の作家に会いたかったので。なぜなら、もしかしたらその作家は私の父親かもしれない、と考えたからです。

わたしは母とふたりで暮らしていました。父はわたしはまだ赤ん坊のころに姿を消し、二度とわたしたちの前に姿をあらわしませんでした。母は父の話はしたがらなかった。わたしはほとんど父のことを知りません。父のものは全部捨ててしまった、と母は聞いていました。父の写真さえ。

創作
幼いころ、わたしがその絵本を開くたび、母は涙を流しました。わたしが文章の意味をたずねても、母は首をふる

ばかりでした。しかし母は本当はその絵本が読めるはずだ、とわたしは思っていました。その絵本はきらいだ、と母はいつもいっていました。そのくせわたしから絵本をとりあげたりせず、わたしがあちこちページをめくっているのを、目頭を押さえながらやさしくながめていたのです。なにか大切なことを思い出すように。

わたしは、自分の顔立ちや髪の色が友人たちとは異なっていることを自覚していました。それが理由でいじめられたこともあり。わたしの父は外国人だったので。そしてあるとき、わたしは母の引き出しから一枚のメモのようなものを発見しました。それは母の筆跡で、スペイン語で書かれた手紙でした。どういう理由でか、差し出されなかったのでしょうか。一番上に書かれていたのは、

Caro Carlos (いとしいカルロス)。

どんなことがつづられていたのかはわかりません。そのときは、わたしはまだスペイン語を読むことができなかったのです。

そして。わたしの大好きな絵本の作家の名前は、やはりカルロスでした。

☆

たったそれだけのことで、わたしの父がスペイン人の絵本作家だったなどというのはいづいぶん飛躍した考え